



木造駅のしゃこちゃん
(2008年6月16日・中国裕撮影)

しゃこちゃん

木村 鐵次郎

(県史編さんグループリーダー)

JR五能線木造駅に初めて降り立った人は、駅舎を見て驚くのではないだろうか。駅正面に巨大な「しゃこちゃん」の像がドデンと立っているからである。チョット不気味なような、夜だったらかなり怖く感じられるかもしれない。高さは17メートルと大きく、いずれにしても迫力満点である。

この「しゃこちゃん」の

と呼ぶが、この亀ヶ岡遺跡の名前からつけられたものである。亀ヶ岡の地名の由来は、江戸時代の初めころ、弘前藩が亀ヶ岡の地に築城しようとした時、工事に伴って大量に甕（土器）が出たことによるという。なお、工事のきっかけとなった亀ヶ岡城そのものは、江戸幕府による一國一城令により途中で中止されてしまった。

出土物は当時珍奇な物として珍重され、『南総里見八犬伝』で有名な滝沢馬琴の『耽奇曼録』に土器の図が

モデルは、1887（明治20）年につがる市（旧木造町）の亀ヶ岡遺跡から出土した遮光器土偶で、「しゃこちゃん」はその愛称である。

紹介されたりしている。亀ヶ岡遺跡からは、江戸時代から現代まで大量の遺物を出土したことも有名で、国内外の博物館や大学の研究室で所蔵されている。

亀ヶ岡遺跡は、約一万年にわたる縄文時代の最後の時期である晩期の遺跡で、縄文時代文化を代表する遺跡として著名である。東北地方の晩期の文化を亀ヶ岡文化・土器を亀ヶ岡式土器

明治時代には土岐襄虫や佐藤郁などの個人や東京帝国大学、戦後では慶應義塾大学、青森県教育委員会や青森県立郷土館などによって発掘調査されている。

製土器と呼ばれる、非常に精巧で華麗な文様で飾られた土器や、赤漆や黒漆で塗られた土器、竹で編んだ籠を漆で塗り固めた藍胎漆器などが特徴的な遺物であるが、遮光器土偶もまたシンボリックな遺物の一つである。遮光器土偶の名前の由来となった遮光器とは、サングラスの意である。横に線を引いた丸い大きな目が、元々は北方民族であるイヌイットの雪面からの太陽の反射による雪目を防ぐために使用した遮光器に形状が似ているので、遮光器土偶と呼ばれた。しかし、縄文時代に遮光器が使用されたかどうかはわからない。なお、モデルとなった遮光器土偶は、高さが36・7cmで、土偶としては大型のものである。1957（昭和32）年に国の重要文化財に指定され、縄文文化を代表する遺物の一つである。現在は上野にある東京国立博物館所蔵となっており、上野の博物館の展示室で対面することができる。